

SMF Press



文化庁 平成27年度 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

あなたと
どこでも
アート
着がわり
プロジェクト

Vol.24
January
2016



撮影：ひびのこづえ

幸福な日

連休初日は埼玉県立美術館で「衣と体のせめぎあい」
コスチューム制作ワークショップのパフォーマンス発表。

私は監修と言う立場で7月から参加者と何度かワークショップを重ねてきて
途中、不安も抱きながら今日の日を迎えました。

良く晴れた紅葉の美しい屋外に16組のコスチュームとダンサーが次々と現れます。

公園の中ではそれとは関係なく人々が休日を楽しんでいます。

その中に突然、音とダンスが始まります。

ブレイメンの音楽隊の様にダンサーに誘われて一緒に移動して行く人達、
予期しない出会いに咄然としながら見守る人や

不思議なコスチュームにボール投げをしていた子供が驚きの声を上げたり

コスチュームとパフォーマーが日常を

しなやかに切り取って行きます。

私は落ち葉の上に座り込み暖かい

日射しを受けまるで

夢を見る様な時間をすごしました。

どの作品も微笑ましく瑞々しくユーモラスで
笑みがこぼれました。

またいつか、この出会いが繋がって

何処かで再会出来る事を願っています。

ひびのこづえブログ「ひびのひび」より

11月21日(土) 北浦和公園
衣と体のせめぎあいファイナルイベント



通崎睦美講演会&木琴演奏会—1935をめぐって

11月28日(土) 埼玉県立近代美術館講堂

「あなたとどこでもアート」の今年のテーマ「衣」にあわせて、古い着物のコレクションで知られる通崎睦美さんに講演をお願いしました。

京都にお住まいですが、埼玉出身の画家、須田剋太に、こどもの頃10年にわたって毎年描いてもらっていた肖像画をお持ちで、埼玉にはそんなユニークな縁もあります。

本業はマリimbaの演奏家。戦前、戦後にわたって日米で活躍した木琴の巨匠、平岡養一が大事にしていた木琴を譲られ、木琴の曲を演奏し、平岡養一の評伝を出版し、このところ木琴の復権に力を注いでいます。

「衣」の話をききたいし実際の着物も見たい、須田剋太の絵も見たいし、木琴の演奏も聴きたい—そういう欲張りなリクエストがすべて叶えられました。



▲演奏中の通崎睦美さん

あれこれあっても散漫にはならないように通崎さんが設定されたテーマは「1935」。

平岡養一から譲られた木琴は1935年製のもの。コレクションしてきた着物が作られたのもその頃のもの。通崎さんの仕事、生活が「1935」をめぐって動いている—ということをおもとに据えて話され、あいまに澄

んで軽やかな木琴の演奏が会場に響きました。

トークゲストは加藤種男さん。アサヒビールの文化事業を長く支え、今は企業メセナの推進者として活躍し、通崎さんとはさまざまな活動を協働してこられました。

加藤さんの話は文化に関わりながら人生を楽しく生きようという励ましに満ちています。2016年に開催されるさいたまトリエンナーレの総合アドバイザーもされていて、その事業のひとつ「1万人のゴールド・シア



▲加藤種男さん

ター」という高齢者による演劇のことも話されましたが、講演会の終了後、さっそく参加したいと申し出てこられた夫妻がいしたほどでした。

会場には128人の人が訪れ、とても密度の濃い時間・空間を楽しみました。(Y.W)

北浦和食堂プロジェクト事前調査報告会&ワークショップ

12月6日(日) 埼玉県立近代美術館創作室

今年3回目の寺子屋では、9月に美術家の増田拓史さんが北浦和西口銀座商店街で実施した調査の報告会とワークショップを行いました。増田さんの活動は、記憶に残っている料理というテーマで街の人々にインタビューを行い、料理を通じて見えてくる街の歴史や特徴を明らかにするとともに、人々の心に変化を生じさせるところを目指しています。

前半は私からSMFと商店街との関係を簡単に説明した後に、増田さんからこれまでの活動と北浦和という街の印象、さらに調査で得られた様々なエピソードについて語っていただきました。一通り話が進んだところで、インタビューで得られたレシピに基づいて再現された料理が登場、商店街の方々に説明をしていただいた後に試食会が始まりました。

「きゅうりの粕もみ」を紹介して下さった横内寛さん

(横内酒店)からはお酒にまつわる話と出身地、長野での生活の記憶について、「真鯿のつみれ揚げ」を紹介して下さった野村幸子さん(喫茶ひとやすみ)からは、長崎の島での暮らしの様子(特に魚とのかかわり)についてお話をいただきました。「サッポロ一番」を紹介して下さった西井戸良介さん(川口信用金庫)からは、部活動にいそむ学生時代のエピソードを披露していただきました。その他にも、みのり屋さんの「ナスとピーマンの醤油炒め」や、中華楼さんの「広東風あんかけ焼きそば」など計5品が供され、全員で折箱に詰めて美味しくいただきました。

後半は、参加者を3つのグループに分けてそれぞれの記憶に残る料理について語り合うワークショップを実施しました。それぞれのグループからは様々な記憶が語られ、料理をきっかけに家族や生活などディープなところに話が及んで、かなり濃密なやり取りが展

開していました。最後に増田さんから、食をメディアとしてアートプロジェクトを行う意義やこれからのアートが目指すべき方向について熱く語っていただき、今年最後の寺子屋は幕を閉じていきました。(S.I)



◀用意された料理を折箱に詰める参加者



▶左より増田拓史さん、西井戸良介さん、野村幸子さん、横内寛さん

連携美術館情報

人間市博物館 アリット

「第19回 むかしのくらしと道具展」1/6~2/16

昭和初期と昭和30~40年代の二つの時代を取り上げ、当時の生活用具や写真を多数展示します。街頭紙芝居や蓄音機でのレコード鑑賞など関連事業も盛りだくさんです。

うらわ美術館

「ワークショップ 和紙で着物の雛形を作ろう」(報告) 1/9

展覧会「縫い—その造形の魅力」に関連して、着物のミニチュアをつくるワークショップを行いました。布を縫う代わりに和



紙を切り貼りして着物づくりの全ての工程を体験。参加者はみな指先に神経を集中させ、気持ちも折り込むようにして黙々と制作を進めていきます。一枚の反物から切り分けられた長方形のパーツが袖や襟となり、ひとかけらの無駄もなく服の形に組み上がっていく実感から、日本人が古くから親しんできた着物の機能美と一枚の布を大切に使い切る心を学びました。

川口市立アートギャラリー・アトリア

「アート年賀状展2016」(報告) 1/8~1/24

みなさまよりお送りいただいた年賀状を一堂に展示する開館以来恒例の企画展。今回は605通もの出品をいただき、版画やコラージュ、手描きイラストや書の作品など力作揃いでした。

川越市立美術館

「この絵、私が持っていました。—収集家・安齊羊造

と近代日本画家との愉快な交流— 2/6~3/21

川越の旧家・安齊家の第13代当主安齊羊造は、明治~大正期に活躍した日本画家たちとの交流を介して絵画を収集したコレクターです。諸資料から羊造の収集活動を紹介し、現在語られる近代美術史の陰に隠れた近代日本画界の一端にスポットを当てます。

埼玉県立近代美術館

「原田直次郎展—西洋画は益々奨励すべし」2/11~3/27

若くしてミュンヘンに留学し、すぐれた西洋絵画の作品を残した原田直次郎。約100年ぶりの回顧展となる本展では、親交のあった画家の作品も交えて、原田の画業をたどります。(A.O)

